

# 2018年度（平成30年度）新入生の学生生活に関する調査 —学生生活とキャリア意識における文理比較・経年比較から—

大風薫・三浦憂紀

お茶の水女子大学 学生・キャリア支援センター

## The Daily Life of New Students (2018) and Their Majors: Career Prospects and Student Support Services

Kaoru OKAZE and Yuuki MIURA

Ochanomizu University : Student and Career Support Center

This paper presents the results of research on new students (and their guardians) in 2018 at Ochanomizu University, focusing on their career prospects and daily lives in comparison with their majors. A total of 393 new students and 384 guardians completed questionnaires about student life, career prospects, dormitories, and their families. The main findings are as follows. (1) The students who do not live at home have more anxiety about their economic life, health, and daily life than those who do live at home. (2) The percentage of students who plan to find a job in a private company is higher than those students who hope to enter graduate school, find a job in the public sector, or become a teacher. Moreover, the percentage of students who hope to enter graduate school or become a teacher has declined over eight years. (3) The percentage of students and their guardians who know about scholarship systems and dormitories is the lowest it has been since the survey began. Additionally, the percentage of students in the natural sciences who know about scholarship systems and the dormitories is lower than those in the humanities.

**keywords** : Campus life, Career, Scholarship, Dormitory, Major

### はじめに

お茶の水女子大学では、学生・キャリア支援センターが主体となり、2011年度(平成23年度)から毎年、学部新入生とその保護者を対象とした質問紙調査『新入生生活調査』を実施している。2018年(平成30年)3月に実施した本調査は8回目にあたる。調査目的は、学生本人および保護者の大学に対するニーズを明らかにすることによって、お茶の水女子大学の学生支援およびキャリア支援活動をより効果的に行うための基礎資料とすることである。

本稿では、2018年度(平成30年年度)の新入生および保護者を対象にした調査における、入学後の生活、大学生活への不安、キャリア意識および学生支援に着目しながら、主要な項目について文系と理系による相違の検討および2011(平成23)年度以降の調査結果との比較分析を行う。

この比較分析を通じて、専攻による相違や時系列の変化を把握することで学生の多様性を理解し、今後の

より良い学生支援やキャリア支援の検討に資することが本稿の目的である。

### 2018年度調査の概要

#### 目的

本調査は、2018年度におけるお茶の水女子大学の学部入学予定者の実情を把握し、有益な学生支援の検討・改善および実施を行うための基礎資料とすることを目的に行い、次の4点を調査課題としている。調査目的や調査課題は2011年の調査開始以降変えていない。

1. 新入生の大学教育や将来への多様なニーズの把握
2. 新入生の標準的な学生生活の状況の把握
3. 新入生の家庭状況からその経済的基盤の推定
4. 国立大学入学者の学生生活・家庭・進路などに関する調査研究を行うための情報収集

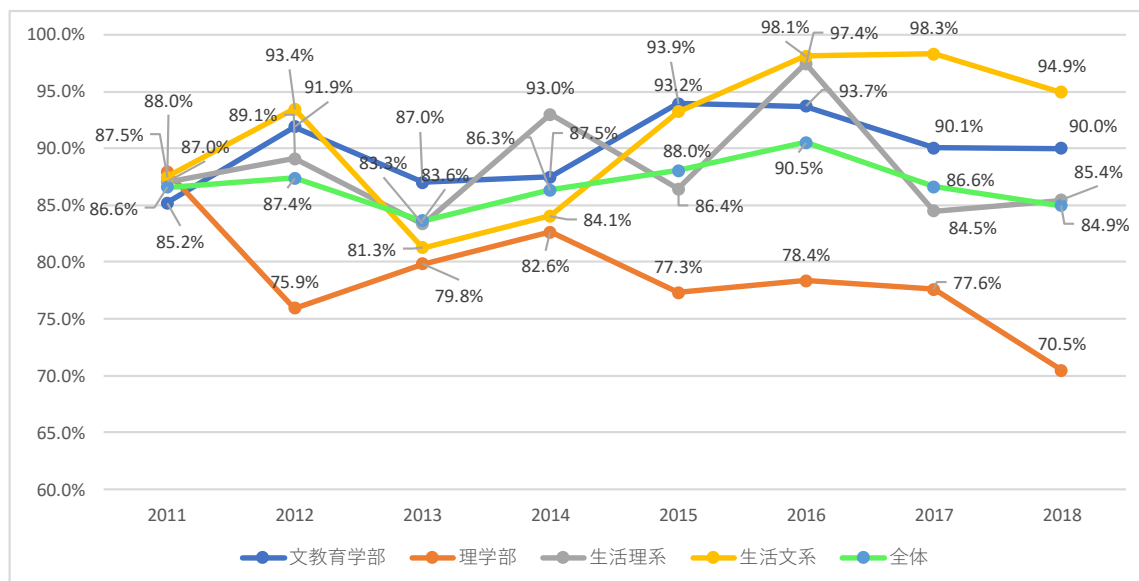


Figure1 お茶の水女子大学の第一志望度

#### 調査時期および方法

調査時期は2018年3月、方法は質問紙郵送法であった。一般入試合格者および保護者に対し、他の入学手続関係書類に調査票および調査票返送用封筒を同封し、他の書類とともに送料不要として回答の返送を依頼した。その他の選考による合格者および保護者には、別途、調査票および調査返送用封筒を送付し、返送を求めた。

#### 調査分析対象

「新入生を対象とした調査（以下、新入生調査）」は、2018年度（平成30年度）学部入学生486名を調査対象とした。調査項目への回答およびデータ使用許可が得られた調査票を有効回答票としたところ、有効回答数は394名（有効回答率81.1%）であった。回答を得られたが、データの使用許可が得られていない者は分析対象から除いている。

学部別の内訳は以下の通りである。文教育学部181名（有効回答率83.8%）、理学部105名（76.6%）、生活科学部107名（80.5%）。文理の比較分析においては、生活科学部を文系と理系に分け、文教育学部、理学部、生活科学部理系（生活理系と表記）、生活科学部文系（生活文系）間の相違を検討している。

新入生の保護者を対象とした調査（以下、保護者調査）では、2018年度（平成30年度）学部入学生の保護者486名を調査対象とし、有効回答数は384名（有効回答率79.0%）であった。保護者調査でもデータの使用許可が得られていない者は分析に含めてい

い。

#### 調査内容

1. 「新入生調査」：新入生調査では、これまでの進路選択、入学後の学生生活、授業料の負担、学生寮および奨学金の認知、学生生活への心配事、期待する学生支援、大学卒業後のキャリア意識、親の関与、出身高校が所在する都道府県、家族構成などについて尋ねた。
2. 「保護者調査」：保護者調査では、主な家計支持者、主な家計支持者の就労状況および職業、母親の就労状況、学生寮および奨学金の認知と希望、期待する学生支援、保護者の世帯年収、学歴などを尋ねた。

なお本調査で使用した調査票は「平成29年度 新入生の生活に関する調査報告書」（お茶の水女子大学2016）と同じ内容である。

#### 分析結果

##### お茶の水女子大学の志望度

Figure1は、受験時にお茶の水女子大学が第一志望であったか否かについての割合を、文理別・入学年度別に示したものである。

2018年度では、全体で85.4%の新入生がお茶の水女子大学を第一志望としており、過年度と同様に高い水準を示し、特に生活文系、文教育学部といった文系学部は継続して第一志望の割合が高い。一方、生活理系は年度間でやや差異があり、理学部においては第

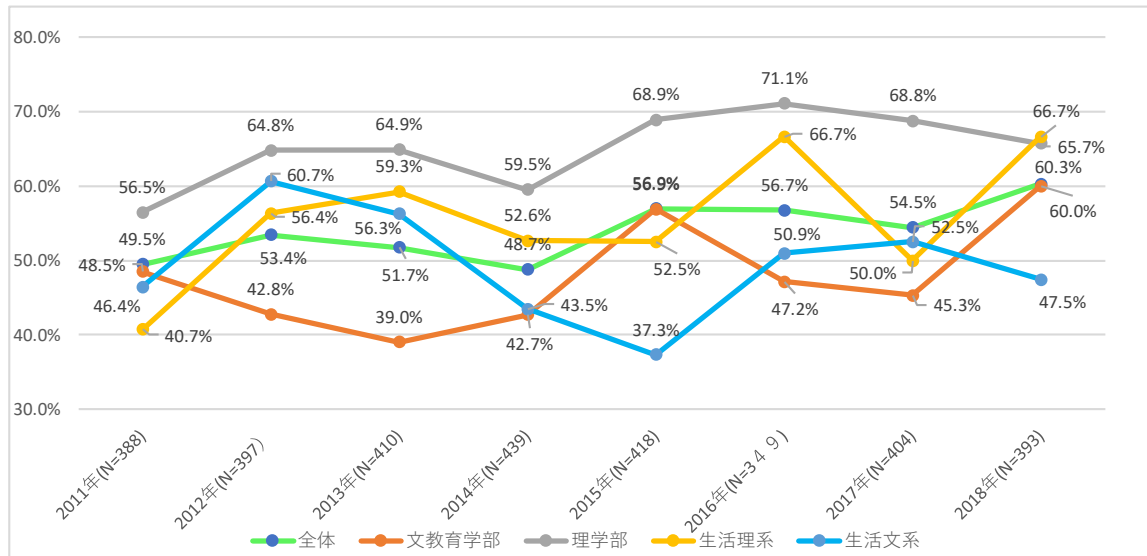


Figure2 自宅通学者の割合

一志望率が低下する傾向が確認できた。

入学後の学生生活について

2018年度（平成30年度）新入生の入学後の学生生活について、「居住状況：自宅通学者の割合」「自宅以外通学者の仕送り予定額」に関する分析結果を示す。

居住状況：自宅通学者の割合

Figure2は、自宅通学者の割合を文理別・入学年度別に示したものである。入学生全体は緑色で示している。全体としては自宅通学者の割合が上昇する傾向が見られる。学部別では、理学部は概ね自宅通学者の割

合が高く、生活理系・文教育学部も年度による違いはあるものの、概ね自宅通学者の割合が高い様子が確認できる。一方、生活文系では、自宅通学者の割合が低下する兆しがある。

自宅外通学者の仕送り額推移

Figure3は、自宅外通学者の月間仕送り金額の推移を分析した結果である。「仕送りなし」の割合は低下傾向にあるが、1～5万円の割合は増加傾向にある。同時に、11～15万円の割合が増加する様子も見られ、学生間に仕送り額の差異が生じつつあることが推察される。

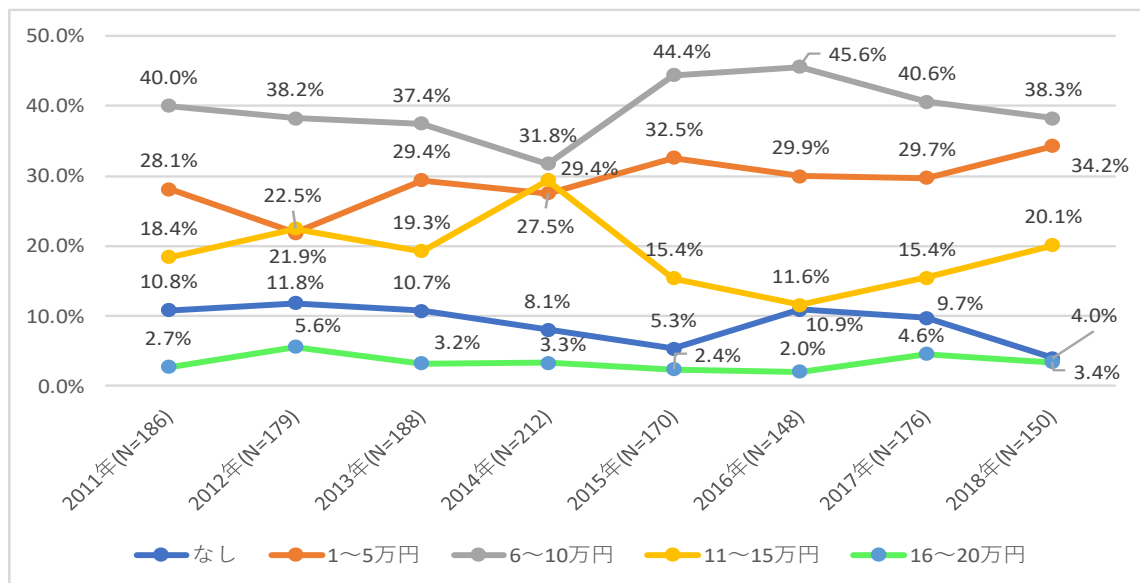


Figure3 年度別の月間仕送り金額

Table1 文理別の平均仕送り額（2018年度）

学部	度数	平均値	標準偏差	平均値の95%信頼区間				最小値	最大値
				標準偏差	下限	上限			
文教育学部	66	8.24	4.68	0.58	7.09	9.39	0.00	20.00	
理学部	36	8.78	4.79	0.80	7.16	10.40	0.00	18.00	
生活理系	17	6.35	2.80	0.68	4.91	7.80	2.00	12.00	
生活文系	29	8.10	3.57	0.66	6.75	9.46	2.00	15.00	
合計	148	8.13	4.35	0.36	7.42	8.83	0.00	20.00	

学部別の平均仕送り額

Table1は、2018年度入学生における自宅外通学者の平均仕送り額を文理別に見たものである。理学部は約8.8万円と最も多く、文教育学部も約8.2万円と多いが、これら2学部は標準偏差が大きい。また、平均値に統計的に有意な差は生じていないものの、生活理系の平均仕送り額は約6.4万円と他に比べて2万円程度少ない。これらの結果は、学部内・学部間ともに仕送り額の格差が生じていることを示すものといえる。

大学生活での不安・心配事

新入生調査では、「授業や単位」「就職や将来」「人間関係」「生活・経済面」「健康面」「日常生活全般」それぞれについて、不安・心配事と感じているかどうか、複数回答可として尋ねている。「平成30年度新入生の生活に関する調査報告書」によれば、2018年度新入生全体では、「授業や単位」について不安・心配と感じる割合が約66%と最も高く、「就職や将来」約56%、「人間関係」約50%、「生活・経済面」約34%と続く。

ここでは、居住状況と仕送り額に着目し、①自宅通学者か自宅外通学者かによって、大学生活における不安・心配事に相違があるのか、②仕送り額別に、大学生活における不安・心配事がどのように異なるのかを分析した結果を示す。まず、居住状況との関連をFigure4に示す。

自宅通学者と自宅外通学者を比較した場合、授業や単位、就職や将来、人間関係といった項目については、居住状況に関わりなく多くの学生が不安・心配と考えていることがわかる。一方、生活・経済面、健康面、日常生活全般においては、自宅外通学者は自宅通学者に比べて不安・心配ありと回答する割合が高いことが確認できた。

次に、自宅通学者における仕送り額と大学生活での不安・心配事の関係を見ると（Figure5）、仕送り額に直接的に関わる「生活・経済面」においては、仕送り額が少ないほど「生活・経済面」について不安・心配事と考える割合が高いことがわかる。同様に「人間関係」について不安・心配事と考える割合も仕送り額

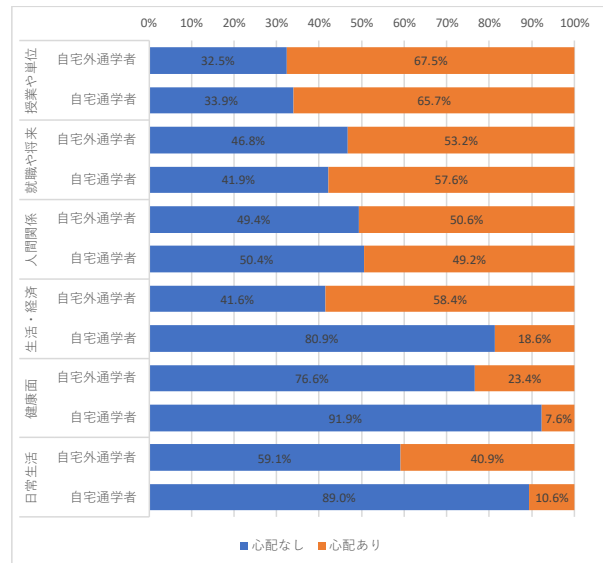


Figure4 居住状況と大学生活での不安・心配事

が少ないほど高くなる傾向がある。

上記2項目のような線形の関係は確認できないものの、その他の面でも仕送り額5万円以内の場合は、いずれの面においても6万円以上の仕送りがある場合よりも不安・心配の割合は高くなる様子が確認できた。

大学卒業後の進路希望とキャリア意識

卒業後の進路希望

Figure6は卒業後の進路希望について過年度との比較を見たものである。この設問は、大学卒業後に希望する進路として「民間企業に就職する」「公務員にな

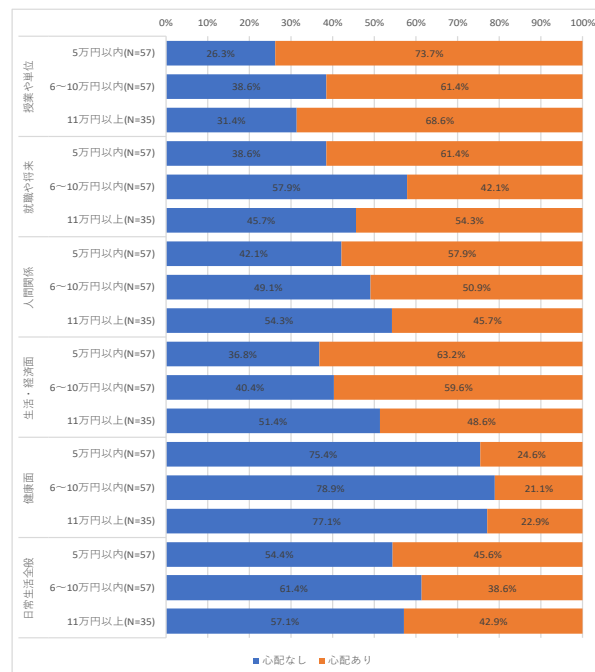


Figure5 仕送り額と大学生活での不安・心配事



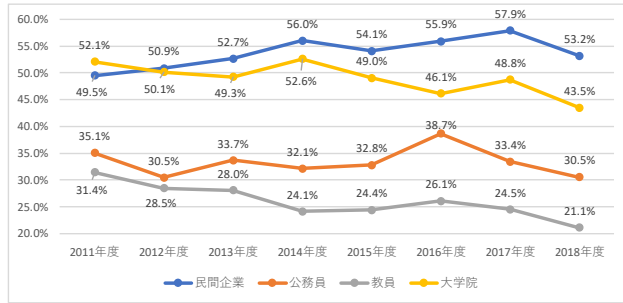


Figure6 卒業後の進路希望

「教師などの専門職につく」「自営など、民間企業・公務員・教師以外の形で就職する」「大学院などに進学する」を含めた7カゴテリを提示し、調査時点での希望を複数回答可として尋ねている。Figure6には、進路希望の割合が相対的に高かった4つの進路について結果を示している。

まず、全体的には、「民間企業」を希望する割合が最も高く、「大学院」、「公務員」、「教員」と続く傾向が見て取れる。ただし、2018年度では「民間企業」以外の3つの進路希望を選択する割合が過去最低となっている。特に「教員」「大学院」は調査を開始した2011年度から約10%ポイント低下していた。

Figure7は、文理別に卒業後の進路希望の推移を見たものである。まず、文教育学部・生活理系・生活文系では「民間企業」を希望する割合が最も高く、理学部では「大学院」が最も高いという傾向がある。文教育学部・生活文系では、「民間企業」に「公務員」希望が続き、理学部は「大学院」に「民間企業」が、生活理系では「民間企業」に「大学院」が続く。

学部別では、文教育学部は調査開始以来進路希望の傾向が変わらない様子が見られる。理学部も進路希望間の順位が入れ替わるほどの大きな変動はないが、最も進路希望の多い大学院の希望率が漸減する傾向がある。生活理系では、「民間企業」「大学院」希望者が2016年度以降に再び上昇する様子が観察でき、生活文系では「民間企業」が右肩上がりでも上昇していることが確認できた。

キャリアプラン

Figure8は大学卒業後のキャリアプランをどのように考えているかについて尋ねた結果を分析したものである。設問は9つのキャリアプランを提示し、それぞれについて、「そう思う」「ある程度思う」「そう思わない」の3件法で聞いた。9つのプランのうち、「平

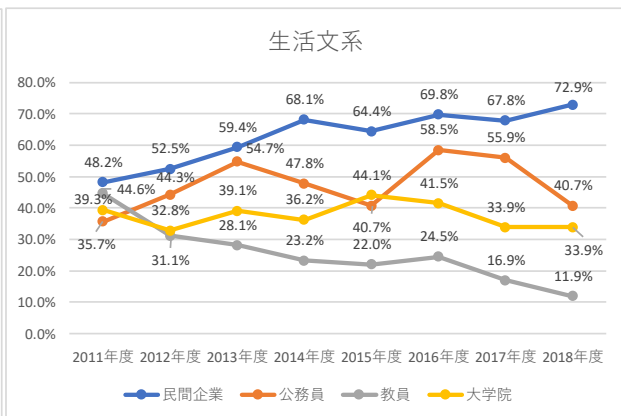
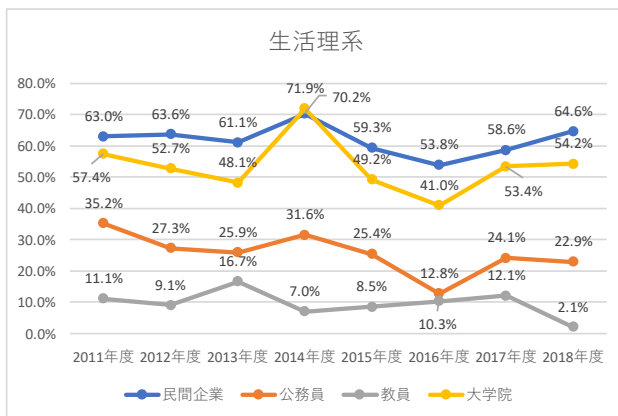
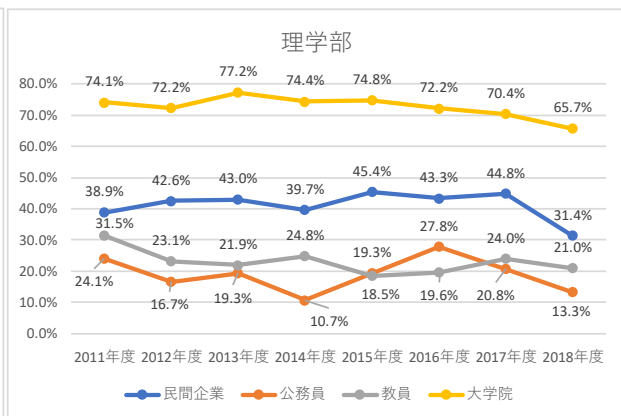
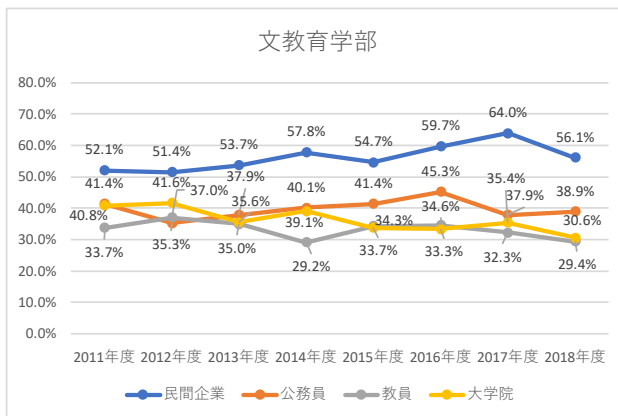


Figure7 学部別の卒業後の進路希望

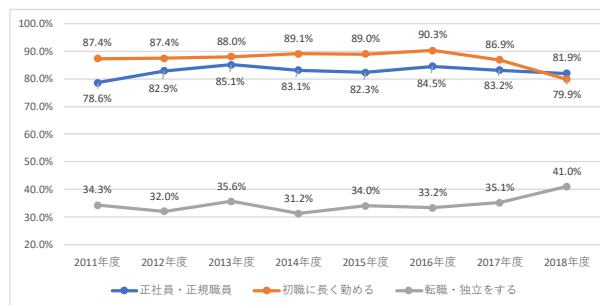


Figure8 キャリアプランの推移

成 30 年度 新入生の生活に関する調査報告書」において、「そう思う」「ある程度思う」の割合が相対的に高かった「すぐに就職して最初から正社員・正規の職員になる（グラフでは正社員・正規職員と表記）」「最初の就職先にできるだけ長く勤める（初職に長く勤める）」「何年かして転職や独立をする（転職・独立をする）」を選び、「そう思う」「ある程度思う」を合算した割合をグラフに示した。

全体の傾向として、2018 年では、「正社員・正規職員」が約 82% と最も高く、この割合は調査開始時点からほぼ変動がない。同様に、「初職に長く勤める」も約 80% と高いが、漸減する傾向が見られる。一方、

「転職・独立する」は 2018 年度で 41% と相対的に低いが、漸増する様子が見られた。

Figure8 で確認したキャリアプランの推移を文理別に分析した結果を Figure9 に示す。まず、全体的な傾向として、「転職・独立をする」というキャリアプランについては理学部以外で漸増傾向が、「初職に長く勤める」については生活理系以外で漸減傾向が見られる。また、文教育学部と生活文系では、「正社員・正規職員」の割合が非常に高いが、理学部では低い。これは「平成 30 年度 新入生の生活に関する調査報告書」で示されたように、理学部は大学院の進学意向が高いことによる影響と考えられる。

### 結婚・出産と仕事

Figure10 は、結婚・出産後も仕事を続けるかについて尋ねた結果を文理別に分析した結果である。結婚・出産と仕事に関するキャリアプランに関する設問は、2016 年度までの 6 年間と 2017 年度以降は異なること、また 2017 年度は欠損値が多かったことから 2018 年度の結果のみ文理別に示す。

結婚・出産後も仕事を続けるかどうかについて、「そう思う」「ある程度そう思う」と回答した割合は全体

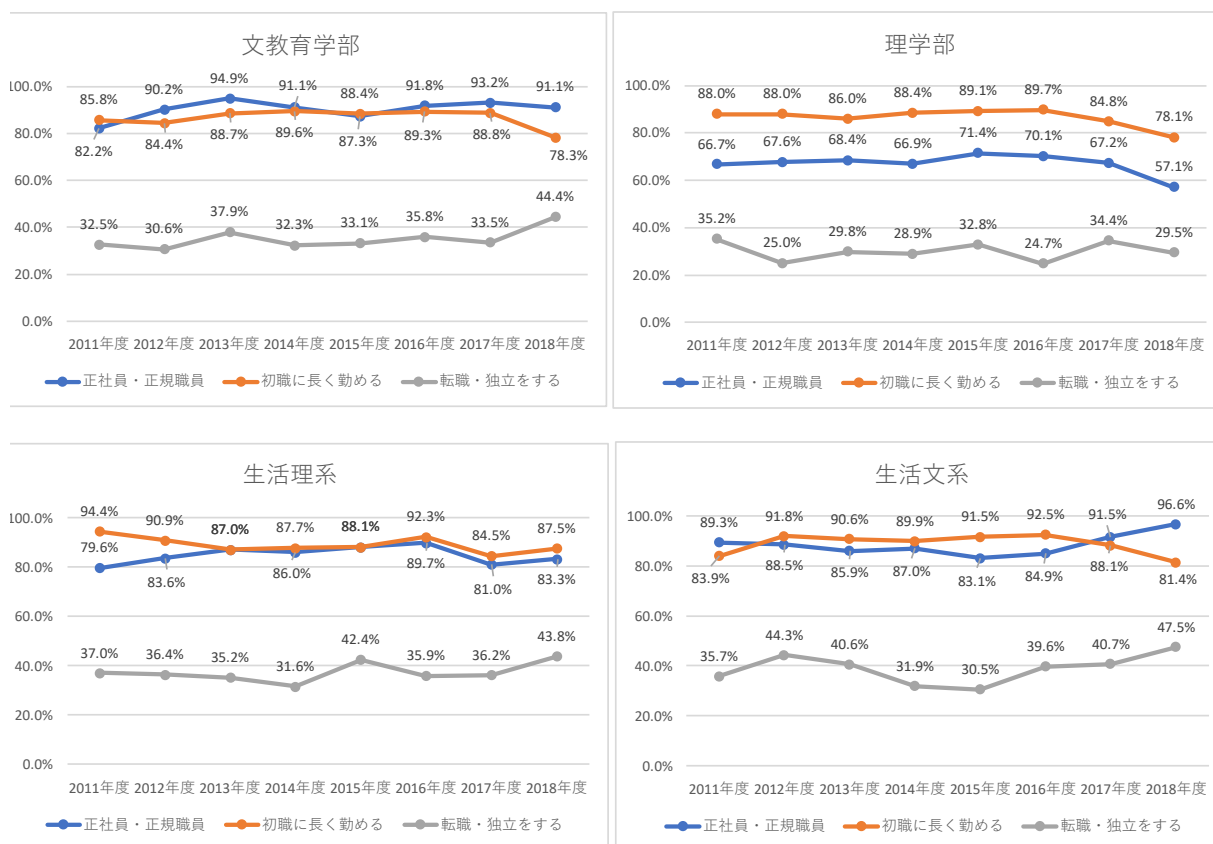


Figure9 文理別のキャリアプラン

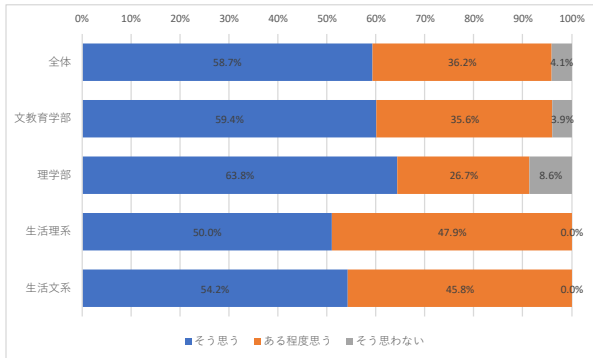


Figure10 文理別の結婚・出産後の仕事

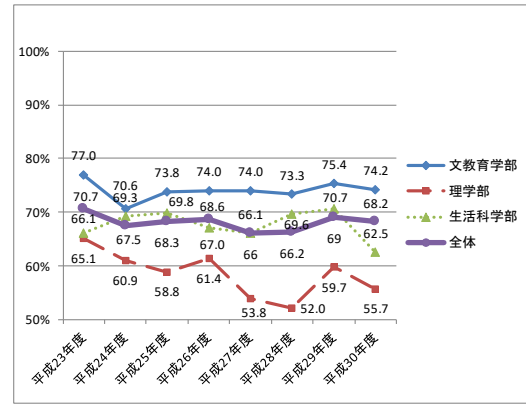


Figure 12 奨学金等制度の認知率 (学部別・新入生)

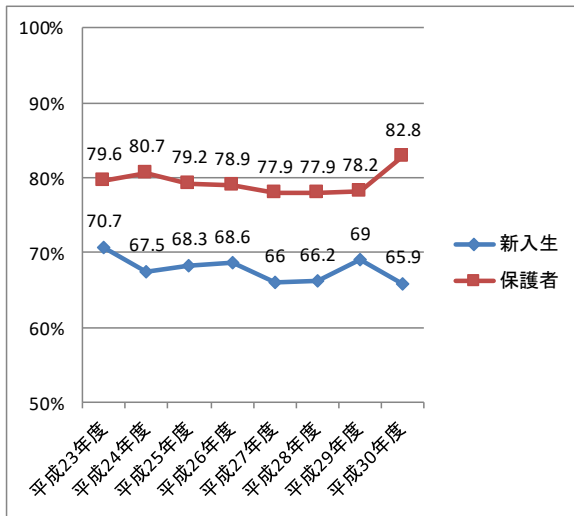


Figure 11 奨学金等制度の認知率 (新入生・保護者)

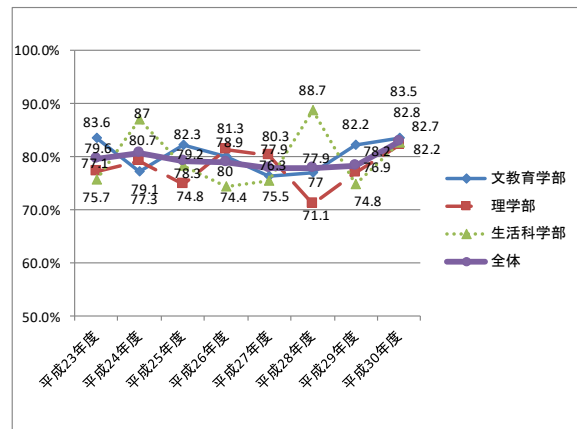


Figure 13 奨学金等制度の認知率 (学部別・保護者)

で58.7%である。文理別では、理学部で「そう思う」割合が最も高く(63.8%)、文教育学部も59.4%と高いが、生活科学部は文理ともに低く、生活理系で50.0%、文系で54.2%であった。本学入学生において結婚・出産後も仕事を続ける意向は概ね高いが、学部間の異同はある。

### 奨学金について

#### 新入生・保護者の奨学金等制度の認知率

次に経済的支援としての奨学金について、過年度との比較も含め、平成30年度調査の分析を行う。Figure11は新入生と保護者の奨学金等制度の認知率の推移を示したものである。

例年、新入生の奨学金等制度の認知率は70%前後、保護者の奨学金等制度の認知率は80%前後であり、新入生よりも保護者のほうが奨学金等制度を認知している。平成30年度調査では新入生の認知率が65.9%と過去最も低く、保護者の認知率は82.8%と過去最も高い結果となった。

#### 奨学金等制度の認知率 (学部別)

Figure12、Figure13では、奨学金の認知率の推移を学部別に示したものである。Figure12が新入生の回答、Figure13は保護者の回答を示している。

Figure12の新入生の回答結果では、例年、文教育学部の認知率が最も高く、次に生活科学部、理学部と学部によって奨学金等制度の認知に違いが見られる。特に理学部の認知率は他の2学部比べて低い。Figure13では保護者の結果を示しているが、学部による認知率の差は新入生の回答ほどは見られない。

次に、Table2は平成30年度の奨学金等制度の認知と学部のクロス表である。Table2で新入生の結果、Table3では保護者の結果を示したものである。生活科学部については、学科によりその特徴が異なると考えられるため、理系学科・文系学科と分けて示している。クロス表はカイ二乗検定を行い、有意確率をそれぞれのクロス表下部に次のように示している。

\*\*\* = p<.000    \*\* = p<.01    \* = p<.05    n.s. = (not significant) (非有意)

Table2の新入生の結果では、奨学金等制度について

Table2 奨学金の認知と学部のカロス表（平成30年度新入生）

		奨学金の認知(新入生)			合計	
		知っている	知らない	無回答		
学部	文教育学部	度数	134	42	4	180
		%	74.4%	23.3%	2.2%	100.0%
	理学部	度数	59	45	1	105
		%	56.2%	42.9%	1.0%	100.0%
	生活科学部	度数	28	16	4	48
		%	58.3%	33.3%	8.3%	100.0%
	理系	度数	40	19	0	59
		%	67.8%	32.2%	0.0%	100.0%
	文系	度数	40	19	0	59
		%	67.8%	32.2%	0.0%	100.0%
合計	度数	261	122	9	392	
	%	66.6%	31.1%	2.3%	100.0%	

\*\*

Table3 奨学金の認知と学部のカロス表（平成30年度保護者）

		奨学金の認知(保護者)			合計	
		知っている	知らない	無回答		
学部	文教育学部	度数	145	23	6	174
		%	83.3%	13.2%	3.4%	100.0%
	理学部	度数	83	17	1	101
		%	82.2%	16.8%	1.0%	100.0%
	生活科学部	度数	39	7	1	47
		%	83.0%	14.9%	2.1%	100.0%
	理系	度数	47	9	1	57
		%	82.5%	15.8%	1.8%	100.0%
	文系	度数	47	9	1	57
		%	82.5%	15.8%	1.8%	100.0%
合計	度数	314	56	9	379	
	%	82.8%	14.8%	2.4%	100.0%	

n.s.

て「知っている」と回答した割合が理学部で56.2%、生活科学部理系で58.3%と低く、理系学生の方が奨学金等制度について認知している割合が低いことが明らかとなった。Table3の保護者の結果については有意な関連は見られなかった。

#### 奨学金等制度の認知率（制度別）

次に、奨学金等の制度別に新入生の認知率の推移をまとめたものがFigure14である。

Figure14の新入生の結果では、お茶の水女子大学独自の奨学金である、「みがかずば奨学金」の認知率が平成25年度以降最も高く、例年4割以上を示している。また、「日本学生支援機構第一種奨学金」、「日本学生支援機構第二種奨学金」の認知率は例年4割程度であったが、平成30年度調査では「第一種」で33.9%、「第二種」で31.5%と過去最も低い結果を示している。これら奨学金制度の認知率に比べて入学料や授業料の免除あるいは徴収猶予制度の認知率は2

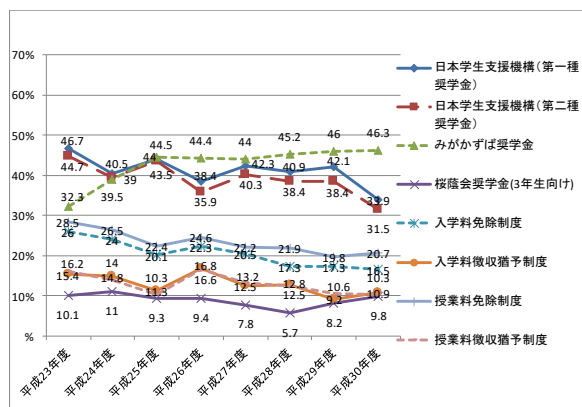


Figure 14 奨学金等制度の認知率（制度別・新入生）

Table4 みがかずば奨学金の認知と学部のカロス表（平成30年度新入生）

		みがかずば奨学金の認知			合計	
		知らない	知っている	無回答		
学部	文教育学部	度数	75	101	4	180
		%	41.7%	56.1%	2.2%	100.0%
	理学部	度数	71	33	1	105
		%	67.6%	31.4%	1.0%	100.0%
	生活科学部	度数	25	19	4	48
		%	52.1%	39.6%	8.3%	100.0%
	理系	度数	29	30	0	59
		%	49.2%	50.8%	0.0%	100.0%
	文系	度数	29	30	0	59
		%	49.2%	50.8%	0.0%	100.0%
合計	度数	200	183	9	392	
	%	51.0%	46.7%	2.3%	100.0%	

\*\*\*

割以下と低い。

Table4は、新入生の認知率が最も高い傾向にあ「みがかずば奨学金」について、平成30年度調査の新入生の認知と学部とのクロス表である。

Table4ではみがかずば奨学金を「知っている」と回答した割合が文教育学部で56.1%、生活科学部文系学科で50.8%と高く、文系学生の方が「みがかずば奨学金」を認知していることが示された。

次に、Figure15では保護者の奨学金等制度別の認知率の推移を示している。

Figure15の保護者の結果では、最も認知率が高いものは、「日本学生支援機構第一種奨学金」、「日本学生支援機構第二種奨学金」であり、平成30年度調査では「第一種」で68.4%、「第二種」で61.4%とそれぞれ過去最も高い割合を示している。また、新入生の回答で最も認知率が高かった「みがかずば奨学金」は年々認知率が向上しており、平成30年度調査では39.2%と過去最も高い認知率を示していた。



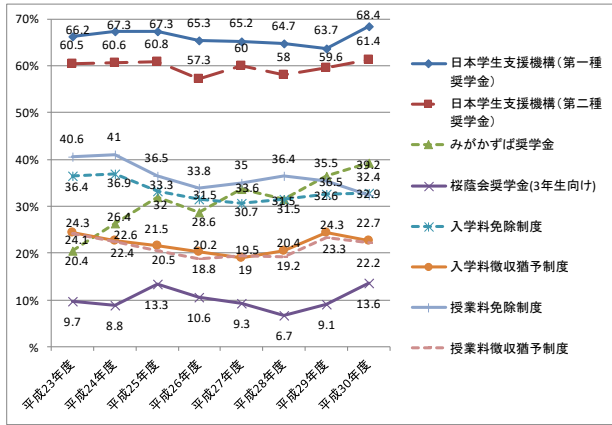


Figure 15 奨学金等制度の認知率（制度別・保護者）

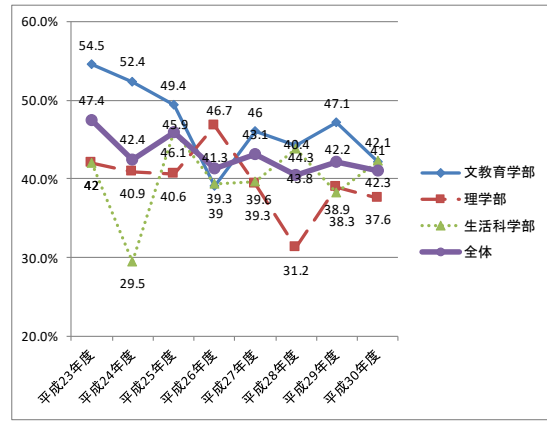


Figure 16 奨学金等制度の利用希望率（学部別・保護者）

Table5 日本学生支援機構（第一種奨学金）の認知と学部のクロス表（平成30年度保護者）

		日本学生支援機構（第一種奨学金）の認知			合計	
		知らない	知っている	無回答		
学部	文教育学部	度数	51	117	6	174
		%	29.3%	67.2%	3.4%	100.0%
	理学部	度数	30	70	1	101
		%	29.7%	69.3%	1.0%	100.0%
	生活科学部	度数	13	33	1	47
		%	27.7%	70.2%	2.1%	100.0%
生活科学部	度数	16	40	1	57	
	%	28.1%	70.2%	1.8%	100.0%	
合計	度数	110	260	9	379	
	%	29.0%	68.6%	2.4%	100.0%	

保護者の認知率が例年最も高い「日本学生支援機構第一種奨学金」について、学部とのクロス表を作成したものがTable5である。

Table5では、日本学生支援機構（第一種奨学金）を「知っている」と回答した割合は生活科学部の保護者の方がわずかに高い割合を示しているものの、有意な関連は見られなかった。

奨学金等制度の利用希望率

続いて、奨学金等制度の利用希望率の推移を示したものがFigure16である。全体の結果と学部別の結果を合わせて示している。

Figure16によると、保護者の奨学金等制度の利用希望率は例年4割程度である。年度ごとにばらつきがあり、学部による差に何らかの傾向は見られなかった。

次に、奨学金等の制度別にその希望率を年度ごとと比較したものがFigure17である。

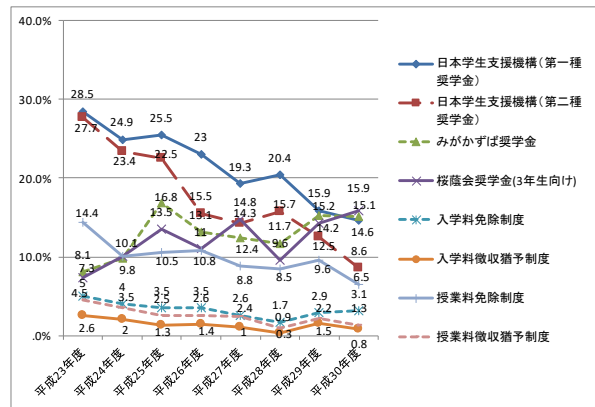


Figure 17 奨学金等制度の利用希望率（制度別）

Table6 奨学金の希望と学部のクロス表（平成30年度保護者）

		奨学金の希望（保護者）			合計	
		希望する	希望しない	無回答		
学部	文教育学部	度数	73	90	11	174
		%	42.0%	51.7%	6.3%	100.0%
	理学部	度数	38	54	9	101
		%	37.6%	53.5%	8.9%	100.0%
	生活科学部	度数	21	23	3	47
		%	44.7%	48.9%	6.4%	100.0%
生活科学部	度数	23	27	7	57	
	%	40.4%	47.4%	12.3%	100.0%	
合計	度数	155	194	30	379	
	%	40.9%	51.2%	7.9%	100.0%	

n.s.

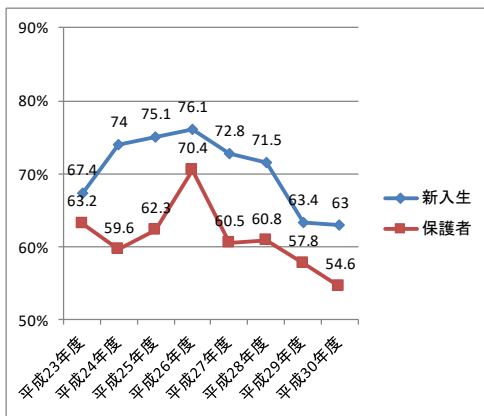


Figure 18 学生寮の認知率

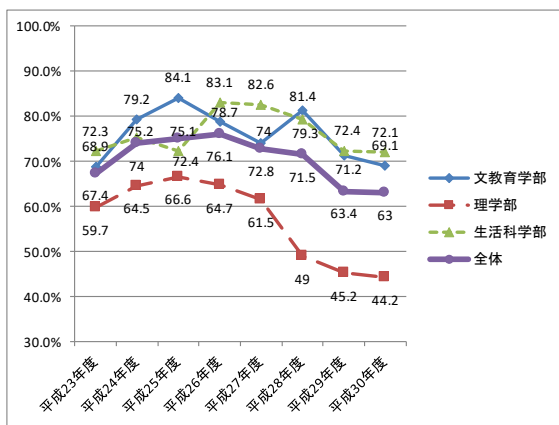


Figure 19 学生寮認知率 (新生・学部別)

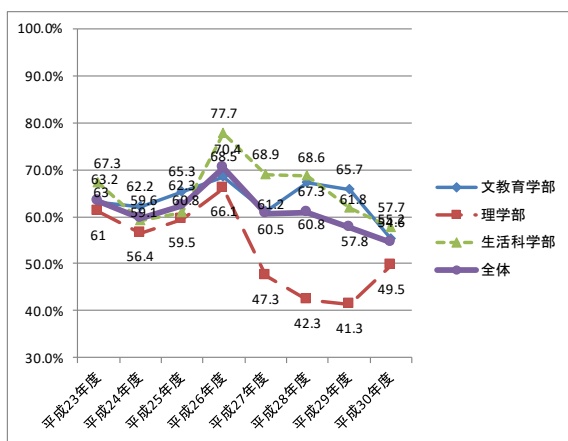


Figure 20 学生寮認知率 (保護者・学部別)

Figure17 では、日本学生支援機構第一種奨学金」と「日本学生支援機構第二種奨学金」の希望率が減少傾向にあることがわかる。特に平成 30 年度調査では「第一種」で 14.6%、「第二種で」8.6%と過去最も低い認知率を示している。平成 30 年度調査では初めて、給付型奨学金である「みがかずば奨学金」と「桜蔭会奨学金」の利用希望率が、貸与型である「日本学生支援機構第一種／第二種奨学金」を上回る結果となった。

また、Table6 では、奨学金等制度の利用希望について、学部とのクロス表を作成したものである。

Table6 では、学部と保護者の奨学金の希望について、理学部の保護者が 37.6%と低い割合を示しているが、有意な関連は見られなかった。

#### 学生寮について

##### 新生・保護者の学生寮認知率

次に生活支援として学生寮について、過年度との比較も含め、平成 30 年度調査の分析を行う。Figure18 は新生と保護者の学生寮の認知度の推移を示したものである。本学には学部生用の寮として国際学生宿舎とお茶大 SCC (Student Community Commons、以下 SCC)、大学院生用の寮として小石川寮がある。そのうちどれか 1 つでも「知っている」と回答した場合の認知率を示している。

Figure18 では、新生の学生寮認知率は平成 26 年度調査の 76.1%を境に低下しており、平成 30 年度調査では 63%と過去最も低い認知率を示している。また、保護者の認知率も同様に平成 26 年度調査の 70.4%を境に低下しており、平成 30 年度調査では 54.6%と最も低い認知率を示している。例年、保護者の認知率よりも新生の認知率のほうが高い。

##### 学生寮認知率 (学部別)

Figure19、Figure20 は学部別に新生・保護者の学生寮の認知率をそれぞれ示したものである。

Figure19 では新生の学生寮認知率の推移について、例年理学部が他の 2 学部と比べて特に低い認知率を示していることがわかる。これは奨学金等制度の認知率と同様の傾向である。特に理学部の学生寮認知率は 2013 (平成 25) 年度調査以降減少しており、2018 (平成 30) 年度は過去 7 年間の中で最も低い 44.2%を示している。

また Figure20 の保護者の回答結果によると新生

Table7 学生寮の認知と学部のカロス表（平成30年度新入生）

		学生寮の認知（新入生）			合計	
		知っている	知らない	無回答		
学部	文教育学部	度数	125	55	0	180
		%	69.4%	30.6%	0.0%	100.0%
	理学部	度数	46	58	1	105
		%	43.8%	55.2%	1.0%	100.0%
	生活科学部	度数	36	12	0	48
		%	75.0%	25.0%	0.0%	100.0%
	生活科学部	度数	42	17	0	59
		%	71.2%	28.8%	0.0%	100.0%
	文系	度数	249	142	1	392
		%	63.5%	36.2%	0.3%	100.0%

n.s.

Table9 お茶大 SCC の認知と学部のカロス表（平成30年度新入生）

		お茶大SCCの認知（新入生）			合計	
		知らない	知っている	無回答		
学部	文教育学部	度数	60	120	0	180
		%	33.3%	66.7%	0.0%	100.0%
	理学部	度数	61	43	1	105
		%	58.1%	41.0%	1.0%	100.0%
	生活科学部	度数	13	35	0	48
		%	27.1%	72.9%	0.0%	100.0%
	生活科学部	度数	18	41	0	59
		%	30.5%	69.5%	0.0%	100.0%
	文系	度数	152	239	1	392
		%	38.8%	61.0%	0.3%	100.0%

\*\*\*

Table8 学生寮の認知と学部のカロス表（平成30年度保護者）

		学生寮の認知（保護者）			合計	
		知っている	知らない	無回答		
学部	文教育学部	度数	96	74	5	175
		%	54.9%	42.3%	2.9%	100.0%
	理学部	度数	50	51	0	101
		%	49.5%	50.5%	0.0%	100.0%
	生活科学部	度数	25	21	1	47
		%	53.2%	44.7%	2.1%	100.0%
	生活科学部	度数	35	20	2	57
		%	61.4%	35.1%	3.5%	100.0%
	文系	度数	206	166	8	380
		%	54.2%	43.7%	2.1%	100.0%

n.s.

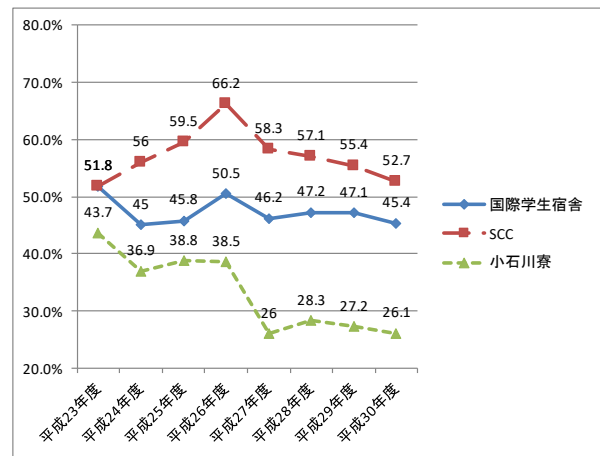


Figure 22 学生寮認知率（寮別・保護者）

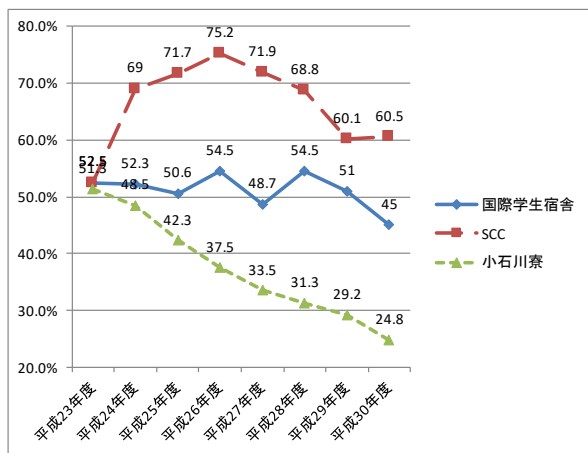


Figure 21 学生寮認知率（新入生・寮別）

Table10 お茶大 SCC の認知と学部のカロス表（平成30年度保護者）

		お茶大SCCの認知（保護者）			合計	
		知らない	知っている	不明		
学部	文教育学部	度数	78	92	5	175
		%	44.6%	52.6%	2.9%	100.0%
	理学部	度数	52	49	0	101
		%	51.5%	48.5%	0.0%	100.0%
	生活理系	度数	22	24	1	47
		%	46.8%	51.1%	2.1%	100.0%
	生活文系	度数	21	34	2	57
		%	36.8%	59.6%	3.5%	100.0%
	合計	度数	173	199	8	380
		%	45.5%	52.4%	2.1%	100.0%

n.s.

の認知率の推移と同様、理学部の保護者が例年最も低い認知率を示している。平成30年度調査では理学部の保護者の学生寮認知率は49.5%であった。

次に、Table7は新入生の学生寮の認知と学部のカロス表である。

学生寮を「知らない」と回答した割合は理学部の学生が55.2%と高い傾向がみられた。ただし、有意な関連は見られなかった。

Table8は保護者の学生寮の認知と学部のカロス表である。

Table8では理学部学生と生活科学部理系学生がわずかに低い認知率を示している傾向がみられたが、有意な関連は見られなかった。

### 学生寮認知率（寮別）

さらに、学生寮別の認知率の推移をFigure21で確認する。

まずFigure21は新入生の回答を示している。これによると、調査開始年度の2011（平成23）年度では3つの寮の認知度が同程度であったが、それ以降の調査ではその認知率の幅が開いている。2012（平成24）年度調査以降は例年、SCCの認知率が最も高く、次いで国際学生宿舎、最も認知率が低いのは小石川寮である。特に2018（平成30）年度調査では、小石川寮の認知率が24.8%と過去8年の調査の中で最も低い認知率を示している。

次に、例年最も高い認知率を示しているお茶大SCCの認知率について、学部とのカロス表をTable9に示す。

お茶大SCCを「知っている」と回答した割合は理学部学生が特に低いことが明らかとなった。他学部では65%以上が「知っている」と回答しているが、理学部の認知率は41.0%であり、半数以上がお茶大SCCを認知していない。

続いて、Figure22によると、2012（平成24）年度以降は、新入生の結果同様、SCCが最も高い認知率を示している。また小石川寮の認知率の減少や、平成26年度を境としたSCCの認知率の減少傾向は新入生の回答と同様の結果であった。

次に、例年最も高い認知率を示しているお茶大SCCの認知率について、学部とのカロス表をTable10に示す。

Table10では、理学部保護者の認知率が48.5%とやや低い割合を示しているが、有意な関連は見られなかった。

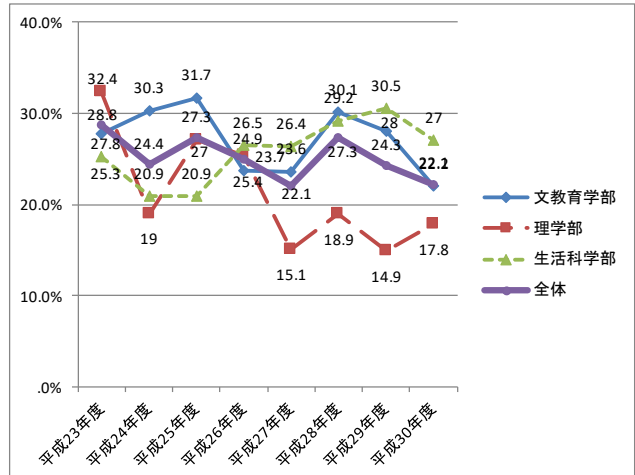


Figure23 学生寮希望率（学部別・保護者）

Table11 学生寮の希望と学部のカロス表（平成30年度保護者）

		学生寮の希望（保護者）			合計	
		希望する	希望しない	無回答		
学部	文教育学部	度数	38	129	7	174
		%	21.8%	74.1%	4.0%	100.0%
	理学部	度数	18	82	1	101
		%	17.8%	81.2%	1.0%	100.0%
	生活科学部	度数	10	35	2	47
		%	21.3%	74.5%	4.3%	100.0%
理系	度数	18	37	2	57	
	%	31.6%	64.9%	3.5%	100.0%	
合計	度数	84	283	12	379	
	%	22.2%	74.7%	3.2%	100.0%	

n.s.

### 保護者の学生寮入寮希望

次に、保護者の学生寮入寮希望について、3つの学生寮のうち1つでも入寮を「希望する」と回答した割合の年度ごとの推移をFigure23にて確認する。Figure23では学部別の結果を示している。

これによると、入寮を希望する割合は24%程度から28%程度の割合で推移している。学部別にこの結果では年度ごとにばらつきがみられ、特に学部ごとの傾向は見られなかった。

次にTable11では、学生寮の希望と学部のカロス表である。Table11によると、理学部の保護者で「学生寮への入寮を希望する」と回答した割合が17.8%とやや低い傾向が見られるが、有意な関連は見られなかった。

次に保護者の学生寮の利用希望について、寮別にそ



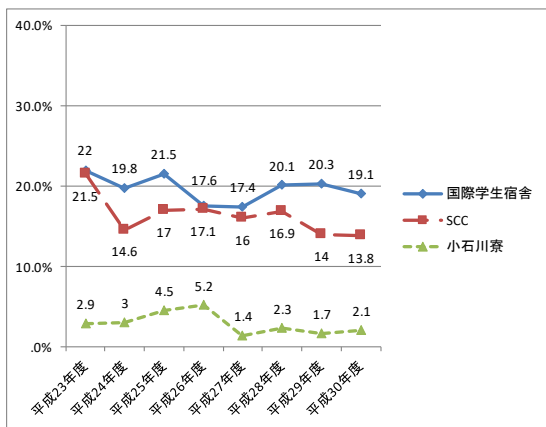


Figure 24 学生寮希望率（寮別・保護者）

Table12 国際学生宿舎の入寮希望と学部のクロス表（平成30年度保護者）

		国際学生宿舎の入寮希望（保護者）			合計	
		希望しない	希望する	無回答		
学部	文教育学部	度数	135	32	7	174
		%	77.6%	18.4%	4.0%	100.0%
	理学部	度数	84	16	1	101
		%	83.2%	15.8%	1.0%	100.0%
	生活科学部	度数	37	8	2	47
		%	78.7%	17.0%	4.3%	100.0%
文系	度数	39	16	2	57	
	%	68.4%	28.1%	3.5%	100.0%	
合計	度数	295	72	12	379	
	%	77.8%	19.0%	3.2%	100.0%	

n.s.

の希望割合の推移を示したものがFigure24である。

学生寮の利用希望率では国際学生宿舎が例年最も高い結果を示している。認知率では3つの寮の中でSCCの認知率が最も高かったが、入寮希望率では例年国際学生宿舎が最も高い結果となった。平成30年度調査では、SCCの入寮希望率は13.8%と過去最も低い割合を示している。

Table12は、例年最も高い入寮希望率を示している国際学生宿舎について、その入寮希望の割合と学部のクロス表である。

Table12では、理学部の保護者の希望率が15.8%と他学部より低い割合を示しているが、有意な関連は見られなかった。

まとめと考察

本稿では、2018年度（平成30年度）新入生の生活に関する調査および保護者調査について、文系学生と理系学生の比較および時系列の変化について分析を行った。以下に主な結果のまとめと今後の学生支援・キャリア支援における課題を整理する。

入学後の学生生活について

自宅通学者の割合を文理別に時系列で確認した分析結果によれば、全体としては自宅通学者の割合が増加する傾向が確認でき、特に、理学部で高かった。一方、生活文系の自宅通学者の比率は、最低比率を記録した2015年度から上昇はしたものの、長期的には低下傾向にある様子が見え、自宅通学者の割合は学部間の違いがあることがわかった。自宅通学者と自宅外通学者では、生活時間の規則性や経済的なゆとりに違いがあり、そのことが大学生生活に影響を及ぼすことが予想できる。そこで、自宅通学者と自宅外通学者に着目し、大学生生活での不安・心配事について分析を行った。その結果、自宅外通学者では、生活・経済面、健康面、日常生活全般に不安を抱く割合が自宅通学者よりも高いこと、また、自宅外通学者の仕送り額と大学生生活での不安・心配事との関連では、仕送り額が5万円以下の場合には生活経済面と人間関係に対して不安を感じる割合が高いことが明らかとなった。

本学の学生の実家暮らしの比率は6割程度で年々増加する傾向は見られる。しかしながら、生活文系では5割以上の学生が自宅外から通学しているなど、自宅外通学者も依然として一定の割合にある。親元を離れた暮らしと大学という新たな環境での生活には二重の不安があるだろう。本学の居住に関する学生支援としては学生寮があるが、教職員としては、自宅外通学者における生活の実情や不安を理解し、学生たちが安心して学生生活を送れるようなケアが必要である。また、独り暮らしに求められる自律的な生活マネジメントの仕方を学べるような機会を提供していくことも重要になるだろう。

卒業後の進路・キャリアプラン

2018年度新入生の大学卒業後の希望進路としては、民間企業の割合が53.2%、大学院43.5%、公務員30.5%、教員21.1%で、希望する進路の順位について2012年度以降変化はない。ただし、大学院および教員については、調査開始以来10%ポイント程度減少しており、時系列では緩やかな減少傾向にあることが指摘できる。また、たとえば生活文系は民間企

業への希望割合が72.9%と他の進路との差異が大きかったり、理学部では大学院希望割合が65.7%で他の進路との大きな相違があったりする一方、生活理学部では民間企業と大学院希望者の差は理学部ほどないなど、希望の進路は専攻による違いがあることもわかった。

キャリアプランについては、正社員・正規職員としての働き方や初職に長く勤めると考える学生の割合は調査以来継続して高く、結婚・出産後も仕事を続けるとする学生の割合も約6割に達している。しかしながら同時に、転職や独立を志向する学生が増える傾向も見られ、学生たちのキャリアプランが広がりつつあることも明らかとなった。そして同時に、このようなキャリアプランについては、専攻による相違も生じている。

以上のことから、今後のキャリア支援の課題は、多様化する学生のキャリア希望の傾向を把握しながら、学生たちが自らのキャリアの可能性を大局的な見地から検討し、選択していけるような支援活動を展開することと考える。

#### 奨学金と学生寮 奨学金について

過去8年の調査で奨学金等制度の認知率は、新入生が70%前後、保護者が80%前後であったが、平成30年度調査では新入生の認知率は過去最も低い65.9%、保護者の認知率は過去最も高い82.8%であった。

学部別にみると、保護者の結果は学部による大きな違いは見られなかったが、新入生の結果は学部による差が見られた。特に理学部が例年低い割合を示している。また、平成30年度の認知率について、生活科学部を文系/理系に分けた学部別のクロス表でみると、理学部と生活科学部理系の学生の認知率が低く、文系学生よりも理系学生のほうが奨学金等制度を認知している割合が低いことが明らかになった。

奨学金等の制度別に認知率をみると、平成30年度の新入生の結果では、「日本学生支援機構(第一種奨学金)」が33.9%、「日本学生支援機構(第二種奨学金)」が31.5%と過去最も低い割合を示していた。平成30年度調査で最も認知率の高かったものは本学独自の給付型奨学金「みがかずば奨学金」で46.3%であり、平成23年度の調査開始以来、その認知率は上昇傾向にある。保護者の結果では、新入生の結果と異なり、「日本学生支援機構(第一種奨学金)」が68.4%、「日

本学生支援機構(第二種奨学金)」が61.4%と過去最も高い割合を示していた。

今回の分析では、理系の学生のほうが文系学生に比べて奨学金等制度について認知している割合が低いことが示された。奨学金等制度による支援が必要な家庭へ情報が届くよう、理系学生への広報を強化する必要がある。

#### 学生寮について

過去8年の調査で学生寮の認知率は、保護者よりも新入生のほうが高い割合を示している。特に平成30年度調査では、新入生の認知率が63.0%、保護者の認知率が54.6%と、どちらも過去最も低い認知率となった。

学部別にみると、新入生・保護者の結果共に、理学部の認知率が例年特に低い割合を示しており、平成30年度調査の新入生の結果では、理学部が44.2%と過去最も低い認知率を示していた。

学生寮別に認知率をみると、新入生・保護者の結果共に、例年お茶大SCCが最も高い認知率を示していた。また、平成30年度新入生のお茶大SCCの認知について、生活科学部を文系/理系に分けた学部別のクロス表でみると、理学部学生の認知率が58.1%と特に低い結果を示していた。他学部では65%以上の学生がお茶大SCCを認知しているにもかかわらず、理学部では半数以上が認知していないことが明らかとなった。

学生寮別に入寮を希望するかどうかを保護者に尋ねた結果では、認知率の結果とは異なり、例年、国際学生宿舎が最も高い認知率を示していた。

今回の分析では、理学部学生の学生寮認知率が他学部比べて低いことが示された。理学部の学生は入学後の予定住居を「実家」と回答している割合が65.4%と他学部比べて高い(文教育学部59.6%、生活科学部56.7%)ことも関連していると考えられる。しかしお茶の水女子大学には、通学距離制限がなく、教育寮の側面を持った「お茶大SCC」という学生寮もある。学生本人がよく情報を得た上で選択できるよう、情報公開を努めていく必要がある。

#### 謝辞

調査にご協力くださった2018年度新入生とその保護者の方々に心から感謝申し上げます。

参考文献

2019年3月17日 受稿

お茶の水女子大学 学生・キャリア支援センター (2018)  
「平成30年度 新入生の生活に関する調査報告書」.